



T-TAC/PEPNet-Japan 2009 年度アメリカ視察報告

RIT における手話通訳者の技能評価について

蓮池 通子（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター）

石野麻衣子（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター）

1. RIT と NTID

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）では、これまで RIT（ロチェスター工科大学）および NTID（国立ろう工科大学）を度々訪問させていただき、日本の大学にはない、すばらしい通訳サービス部門の組織体制や、質の高い手話通訳者・文字通訳者の派遣サービス、さらに、通訳者の技術をより高めるための研修及び評価方法についてお話をうかがってきました。これらの内容に関しては、PEPNet-Japan 発行の『2007 年度聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして アメリカ視察「高度専門領域に対応した手話通訳者の養成」報告書』に詳しく書かれていますので是非ご一読ください。

今回の視察では、RIT で活躍している手話通訳者の評価をどのようにして行っているのかに焦点を絞り、実際に行われているスキルアセスメント（技能評価）のポイントとなる項目についてお話をうかがって来ました。

2. 手話通訳者のポジション

まず、RIT での手話通訳者のポジションについて触れたいと思います。RIT では、手話通訳者に 4 段階のポジションを設定しています（表 1）。このポジションは上から、「Senior Interpreter（上級通訳者）」、「Interpreter（通訳者）」、「Associate Interpreter（準通訳者）」、「Apprentice Interpreter（見習い通訳者）」となっています。

これらのポジションによって支払われる給与も異なります。目安としては、上級通訳者で 1 年間に約 650 万円であるということでした。

この 4 段階のポジション分けは、スキルアセスメント（技能評価）によって行われているということでした。それでは、次にこのスキルアセスメント（技能評価）についてご紹介します。

表1 通訳者のポジション

技術	通訳者のポジション
高 ↑ ↓ 低	Senior Interpreter（上級通訳者）
	Interpreter（通訳者）
	Associate Interpreter（準通訳者）
	Apprentice Interpreter（見習い通訳者）

3. Skill Assessment Criteria（技能評価テスト基準）

スキルアセスメントというのは、簡単に言うと技能試験のことで、この試験は、アメリカ手話の読み取り通訳と聞き取り通訳、英語対応手話の読み取り通訳と聞き取り通訳の計 4 パートに分かれています。もちろん上位の通訳者になるためにはより難度の高い試験をクリアする必要があります。

このスキルアセスメントのために作成されたのが、Skill Assessment Criteria（技能評価テスト基準）です。これは、3つのカテゴリーがあり、その下に 4～5 つの下位項目が設定されています。

表2 Skill Assessment Criteria（技能評価テスト基準）

上位 カテゴリー	下位カテゴリー	解説
通訳プロセスの調整	理解	通訳者に分析力があるかどうか。
	自己モニタリング [通訳者の内的状況]	通訳者の心が通訳に表れていないか。あからさまな修正をしたか。など
	予測	話者がこれから話すことを正確に予測できたか。
	話者の主張・意見・ 考えなどの関連付け	話の概念を一つの自然な流れとして通訳できたか（例えば、同一の専門用語を、話の序盤と終盤で一貫して同じ表現で表出できているか）
メッセージ の正確性	省略と脱落	不適切な省略や脱落がないか。
	歪曲	話の細かいところまで整合性がとれた通訳か。
	言語形態	その場の拡張にあった通訳かどうか。
	感情・情緒	話者の声の調子、表情、ムードを同じニュアンスで表出しているか。
	談話	通訳を通して意味のある会話になっているか。
目標言語	訳出と発音	CL、表情、口形など、目標言語が明瞭であるか。
	意味論及び語彙	正しい手話語彙の選択がされているか。
	文法	ネイティブから見ても納得できる通訳か。
	プレゼンス [通訳者としての 存在感、雰囲気]	技術が伴わない通訳者は、話者の発話にひっかかり、「伝える」部分に影響が出てしまう。このようなことがないように通訳者として存在しているか。

これらの項目について、通訳者は 0～4 の 5 段階評価で評定されます。スペースの関係で掲載することはできませんが、実際には各下位項目について、通訳がどのような状況だと評価 0 で、どのような状況だと評価 4 になるのかまで、具体的に示されています。このようなスキルアセスメントを受け、通訳者はより上を目指してステップアップしていくわけですが、我が国にはこのような仕組みは存在せず、非常に興味深いものでした。今後日本でも、日本の現状に則した評価基準が作成されることが望まれます。